

table

vol ⑤

建築家と建築から
街を活気づけるマガジン



竹原義二さんの黒板授業

20年以上続く
「建築と子供たち」のこと

学生の学びかたに学びたい！

HYM@インタビュー

京阪神の建築事務所
若手スタッフ座談会

建築家と建築家
長坂大×波多野崇

特集
いつまでも
学ぶこと

特集 いつまでも学ぶこと

- 02 竹原義二さんの黒板授業
- 05 20年以上続く「建築と子供たち」のこと
- 08 学生の学びかたに学びたい！ HYM@インタビュー
- 09 建築家アンケート どんな風に学んでいますか？
- 10 独立した建築家に向けた日々 京阪神の若手スタッフ座談会

連載

- 12 建築家と建築家 vol.05 長坂 大×波多野崇
- 14 あの人のオススメ
 - ・朽木順綱×菜の花食堂(大阪・梅田)
 - ・八木康行×サント ペヴィトーレ(兵庫・元町)
- 21 わたしのtable 中田光輝さん(GENETO)の事務所テーブル

JIAのこと

- 16 JIA TOPICS
 - ・国際交流で中東へ(住宅部会・梅原悟)
 - ・すまいまちづくり育成塾
 - 「T-CUBEによるボクたちワタシたちの村」(兵庫地域会・尾瀬くみ)
- 18 各地域会から“ニュースな出来事”
滋賀・平居 晋 / 京都・岡田良子 / 兵庫・菅原英房
大阪・坂井信行 / 奈良・山本光良 / 和歌山・瀧川嘉彦

table

建築家は自ら日々バージョンアップを心がけています。
建築家は継承だけでなく、伝統を活かすことを心がけています。
建築家は教えたり伝えたりすることに加え、
刺激剤であることを心がけています。
建築家は学ぶことを楽しいことだと知っています。

JIA近畿支部 広報委員長 萬野光雄



建築家の竹原義二さんは「黒板授業」と題した特別講義を長年続けてきました。黒板を目一杯に活用したその講義に感銘を受けて、今、建築に携わっている教え子も少なくありません。黒板授業で竹原さんが伝えようとしてきたことについて、あらためて伺いました。



黒板授業

竹原義二さんの

撮影・岡本佳樹

——黒板授業を始めたきっかけを教えてください。

僕が大阪市立大学で富樫頼（さとし）先生と出会って、そこから非常勤講師をやることになったんだけど、どうしても教室の中だけで授業をしても面白くないのね。本来であれば学生と一緒に外へ出て、あらゆるモノの見かたを感じられたらいいのに、授業だとそれは難しい。それで、僕が最近見たこととかを黒板にだーっと描いて話すようになって。ひとりですらってもつまらないので、友人の建築家の貴志雅樹を誘って、僕が描いたものに貴志が上書きをして、また僕がその上に描いて…ということを黒板上でやりながら、それぞれが考えてることを話しあうようになったのが最初です。

そのうちに僕の授業は月曜日の1限目に決めました。というのも、黒板に描くのに時間がかかるので、授業前から先に行って描き始めないといけなくて、だと、1限が都合がいいし、月曜日にしたのは、学生たちがいちばん眠いな、しんどいなと思って学校に出てくるでしょ、すると、朝いちから先に入って黒板に描き始める僕がいて、おこの授業はなにか違うなと感じ取ってくれるかなと思っ

——黒板が扱いにくいと感じることはありませんか。

僕には描きやすいね。どこに何を描くかというレイアウトを最初から決めてるわけじゃないんですよ。黒板の幅が6mあったりするので、図を描いた余白に字を書いていったり、後からなんとでもレイアウトをやり直せるCAD（キヤド）みたいなものとは違って一発勝負。しかも、その場で手で描いてみせることが大事で、まずチョークで真っすぐに線を引いて、1枚の黒板の中に描きたい図面などをどう取

めるか。その縮尺、スケールをばつと決めて、1mがだいたいこれくらいだなと点を打っていく。そこから始めるんです。あと、黒板って叩いたりもできるからね。そうするとチョークが流れていくし音も出る。

——話す内容も決めているわけじゃないんですか。

原稿があるわけじゃないから毎回変わりますよ。ただ、僕がつくってきた建築のことはあまりしゃべらない。話してもしょうがないからね。それ

事務所には過去に使った黒板シートがいくつも保存されている。



年以上続く「建築と子供たち」のこと

建築と子供たち(Architecture & Children)はもともとアメリカで開発されたカリキュラムで、建築を通して子どもたちの創造力を育むための総合教育活動として始まりました。京都では2004年にスタートして、以来、毎年の夏休みを中心に行われ、2025年7月27日に27回目となる「建築と子供たち」が実施されました。

建築家の声

岡田良子さん

2009年から参加

子どもたちが立体的に考えるというのは難しくて、それを形にするために私たちがお手伝いをします。マカロン屋なので屋根もマカロンにするって子がいたけど、京町家なので、景観条例的にも(笑)。なので、窓の形をマカロン状にしました。そうやって形にしていって過程は子どもにとってもいい経験だと思っています。

後藤直子さん

2009年から参加

現実的なスケール感のことや空間をどうしたいのかってことまで尋ねていくので、いわゆる子ども向けの教室とは違ってきます。作業を続けていくうちに、親子の関係もだんだんチームのようになってきて、子どもの指示を親がおおぐような場面も。子どもの思い描く建築を実現するために、最後は親と建築家も必死になってやる、それがいいんです。



今回の課題は「京町家」。8m×18mという細長い敷地が与えられ、そこに住宅に加えて「社会とつながる働く場」を設計。構想、図面、模型製作までを1日でやり遂げます！



構想・図面制作

01



よりも僕は、学生たちと全国各地の建築を実測してきたから、そうした具体的な体験のことからはじめることが多い。やっぱり最終的には土地や歴史の話になるかな。専門家として建築を捉えようとするんだけど、結局は建築なんてちっぽけな話で、たとえばその建築を構成する材料は何なのか、木としたら、それはどこに植わっていた木でどう運んできたのか。どうして？ なんて？ と聞いたっていいから。物事の表面だけを見るのではなく、深く深く掘り下げていくこと、その能力が大事なんじゃないかな。

——教えるというよりは尋ねていくような授業。

そう、僕は今このように考えてるけど、君らはどう考える？ って聞いかけなんです。授業といっても教えるという意識じゃない。僕も障害がある人の施設だとか、いろいろやってきた中で、の気が付きがあるし、建築というのは自分が経験してきたことも大事なことだけど、自分が知らない世界のことを想像するのも重要なこと。その場所に行ってみて、少しでも理解しようとする、ものを想像していく能力も必要です。お金を持つてる人の家をつくるのも建築やけど、そうじゃ

ないものもいっぱいあるんやぞって。——学生にかぎらず、表面的な理解で留まっていることが多いように思います。

そうかもしれないね。大阪万博にしても、それがいいとか悪いとかではなく、あれがどういう場所なのか、何を埋めてできた土地なのか、とか一つ一つ考えていかないと、やっぱり知らないままやから。

——最後に、竹原さんの勉強のスタイルって何かあれば教えてください。

そのときどきでいろんな人と出会って、その出会いが自分の幅を広げていく。自分の人生の節目になるんですね。僕は他者と出会って、なんでこうなってるのか、すごいなと考えるのが大好きで、共鳴することが多いから。せやけど一方で、自分の生き方はブレないようにするのも大事。そうやって得てきたことを自分の考えとして出せるのが建築でもあって、だから、これは非常にラッキーな仕事なんです。別に大きな建築じゃなくてもいい、大小じゃなくて、自分が何をやりたいのか。そこを通すことが大事なんだと思っています。



無有建築工房／竹原義二
1948年徳島生まれ。1978年無有建築工房設立。50年近い設計活動の中で、住宅を中心に250を超える作品を手がけ、受賞も多数。25年秋、黒板授業についてまとめた著作を刊行。

「僕は、いちばんいい時期に生まれたと思っているんです」という。

撮影：坂下丈太郎





時間内につくり終えた後は担当建築家を中心に講評会も開催。子どもたちが一人ずつマイクを握って設計意図を話すのに対して、「天井高を尋ねたら5mだというんだけど、ちゃんと町家のプロポーションが守られていて…」といった本格的な講評が続いた。

04 講評会

「建築と子供たち」 これまでのダイジェスト

2004年:第1回は6m×6m×6mの敷地に「自分の部屋だけの家」を設計、模型作りまで 2009年:祇園祭で知られる鉾8基を90人の小学生たちと制作 2010・2011年:LEDを活用した灯籠の設計と製作、高瀬川での灯籠流しまで 2020年:コロナ禍でも途切れることなくテレワークショップで展開。アルド・ロッシの世界劇場をペーパークラフトでつくるという内容



◀アーカイブサイト



この日参加した建築家たちの集合写真。多くの建築家関わっています。



実行委員長として現場を支えた
萬野光雄さん。



模型制作 02



集まったのは小学3年生から中学3年生まで20人の子ども達。リピーターが多いのもこの企画の大きな特徴。時間内に仕上げるために付き添いの保護者も全力で参戦。



自宅の上に子ども食堂を設けた社会性の高いプラン、1階にグランピング施設やコンビニがあるプラン、事前に京町家のことを予習してきた成果を活かして、通り庭や坪庭をきちんと設けつつ屋根の一部を開けて自然光を採り入れた団子屋のプランなど、子どもの発想力を侮るなかれ！という力作が続々。

完成 03



建築家の声

矢部直輝さん
2022年から参加

JIAに加入する前からこの活動のことは気になっていて、入ってすぐにお手伝いを始めました。1日で設計して模型までつくりきるののかかなりのハードワークで、保護者さんもありかりしたり、子どもたちも疲れきたりしながら、でもとにかく最後までやりきる。あんまりそんな経験ってないと思うので、子どもたちのいい体験として残ってくれたらなと思っています。



▼若野豪宏さん・俊作さん(小3)

今回は参加者側で

普段は子どもと建築の話をするのはあまりなくて。子どものアイデア(1階はサッカーショップに、屋上にサッカー場も今日まで知らなかったけど、面白かったですね。これだけ小さな頃から建築に触れる機会ってあまりないので、すごくいい試みだと思います。



▼荒川晃嗣さん

2004年から参加

私たちも楽しいんですよ。子どもたちが一生懸命に模型をつくるのを手伝っている、自分が建築を勉強し始めた頃ののこを思い出して初心に戻れるので。日頃の仕事ではいろんな制約があって四苦八苦してるわけですが、この場ではそんな制約がなくて関係ない。やりたいことを形にするという原点に触れて、私たちのほうこそがリフレッシュしているのかもしれないですね。

ここにいる建築家は大学で教えておられる先生も多いですが、それとまた違ってね、教えるというよりは一緒に考えるという感じ。その子の持っている芽みたいなのを引き伸ばして形にする感じ。でもこれって、私たち建築家のいちばん大事な仕事と同じなんです。クライアントから依頼があって設計を始めるんだけど、その人のただ言う通りにプランを書けばいいということではなくて、その人が希望する建築の形というのはその人自身も明確にはわかってない、ただ漠然とあるんですね。だから、その人の本当に望むものをあの手この手で引き出して見つけるのが私たち建築家のいちばん大切な仕事。それを見つけていくにつけてしまつたら、いくつ立派なものができても失敗なんです。だから、子どもたちの望むものを見つけて、それをいかに膨らませるかという今日の一連の流れは、建築家にとっても本質的なことなんです。

4つの質問で尋ねる 建築家たちの 学びスタイル

4つのQ&A

- 1 現在の学びのスタイル
- 2 新たに習得したこと
- 3 チェックするメディア
- 4 胸に刻んでいる言葉

どんな風に学んでいますか？ 建築家アンケート

川上 聡 [川上聡建築設計事務所]

メキシコのレゴレッタ事務所勤務を経て、現在は京都を拠点に活動。

- 1 手を動かしながら学ぶ
- 2 クラシックギター
- 3 建築雑誌、建築ウェブメディア
- 4 「ただ面白いものをつくりなさい」リカルド・レゴレッタ

島 桐子 [アトリエクウ一級建築士事務所]

1997年アトリエクウ設立。のんびりマイペースで仕事をしています。

- 1 様々な展覧会へはできる限り出向くようにしています
- 2 特になし
- 3 新聞
- 4 平面が美しい建物は美しい

松本和也 [松本和也建築工房アスク]

最近は地方での設計が中心。仕事も遊びも全力で取り組み、充実した毎日。

- 1 音声と字幕も英語にして映画を観る。6割理解できればよしとしている
- 2 英語の学び直しとマウンテンバイクで山を走るトレイル。トレイルは身体を使って地形をトレースし、感覚で環境を捉えることができる
- 3 図面を描きながらのBBCラジオ
- 4 特になし

矢部直輝 [イン・エクスデザイン]

- 1 建築から遠いところ、あるいは別の場所で建築的に考えること
- 2 宅地建物取引士・宅建業免許
- 3 athlete ranking.com (陸上選手の情報や競技記録)
- 4 特になし

立ち位置を活かせることも結構あるかもしれない。

廣田 うん、そういう立場から、大きな建築を建てることはできなくても、小さくてもフィジカルな場をつくることはできると思っているので、それは大切なことと思う。

水野 A-1の力も加速して、ますます



YONEDA RYUTO

米田 龍人さん

大阪芸術大学建築学科 非常勤助手
卒業設計では、あいりん総合センターを計画地としてスケートボーダーとしての経験を投影して設計。

米田 僕は総合芸術大学の中にある建築学科に通っていたので、グラフィックデザイン専攻、陶芸専攻の子ともチームをつくって、ポッドキャストとかもやっていて、スケボーのこともそうだけど、いろんなことをやってる人たちが周りにいることが僕にとっての学びになっていると思います。領域を横断すると



MIZUNO SHOTA

水野翔太さん

大阪公立大学大学院 都市系専攻 建築学分野2年
卒業設計では、視覚障害者を触覚者と捉えて触覚的に都市を再考。学内最優秀賞をはじめ多くの賞を受賞。

均一化される時代にあって、やっぱり最終的に自分たちが動かされるのは人だと思う。こいつなら裏切られてもしようがないと思えるだけの人がこそが大事じゃないかなと考えています。

これからの活動も楽しみにしています。最後に、それぞれの立場で「学び」をどう捉えているか教えてください。

米田 僕は総合芸術大学の中にある建築学科に通っていたので、グラフィックデザイン専攻、陶芸専攻の子ともチームをつくって、ポッドキャストとかもやっていて、スケボーのこともそうだけど、いろんなことをやってる人たちが周りにいることが僕にとっての学びになっていると思います。領域を横断すると

いうことは大事にし続けたいですね。

水野 僕はこの後、1か月間、スペインにある建築事務所のワークショップに参加して、世界各地から集まる人とコミュニケーションをとりながら設計課題などに取り組む予定です。その先も単純に海外で働くというよりは、順にいろんな国に暮らしながら游牧的に建築家をやってみたいなと

「HYM@」インタビュー 学生の学びかたに 学びたい！

撮影・坂下丈太郎

4月に「卒業設計の前と後」と題したトークイベントをHYM@で企画していましたね。

米田 うちの大阪芸術大学での企画なんです。が、どうせだったら誰かとやりたいということなのでこの2人を誘って、じゃあいつ



INTERVIEW:HYM@

合同卒業設計展を通して出会った3人が、そのまま「HYM@」（ヒーマ）というユニットを結成。これから社会に出ようとする彼らが考えていることは何か。三者三様な建築との向き合い方を聞きました。

見にくれたりして、なんでも躊躇なく言い合える。僕自身は奥手な面もあるの、で勢いで引張ってもらえるのもありがたい。

どんなことをやっていきたいとかありますか。

水野 それぞれ違うことを思っているだろうけど、僕はワークショップだとかアクティブな場を設計していきたいですね。これから建つ建築に合わせたワークショップとかは実際にありますけど、そういった意味付けなしで後から価値がわかるような場が今は減っているような気がするの。

米田 僕は普段からスケボーを趣味でやっていて、ストリートの現場では学校や建築の世界では会わないような人とも関わりが生まれるんです。自分たちがまだ何者でもないという立場も利用しながら、分野を横断している人々たちと関わりたくないかなというのには常に考えています。

廣田 チームで活動すると、逆に今までは大学という枠内で守られていた



HIROTA SO

廣田 蒼さん

滋賀県立大学大学院環境科学研究所 環境計画学専攻2年
卒業設計では、琵琶湖の港への設計を通して、湖上交通の再興と地域自立型の共同モデルを試みた。

んだというのも見えてきて。自分たちですべて決定して、トライアンドエラーができるということに大きな価値があるかなと思います。

水野 ひとりの建築家がトップに立つて事務所を構えるという時代から、それが少し厳しい時代になってきた感覚もあります。が、いつか3人で事務所を設立するというのもない、グループでの活動のあり方の可能性もあっていろいろあってもいいはず。たとえば、こうやって学生のうちから活動をしていても、そのまま独立する学生はほぼいない。やっぱりどこかの事務所で何年か働くという人がほとんどで、その間、自分の名前は消えて社会と隔絶されてしまう感じもあるんです。たとえば、そうした期間でもHYM@として活動を継続できれば面白いんじゃないかな。

米田 なるほどね。僕は今、学校で助手という先生でも学生でもない立場だからこそ、学生からいろいろと相談を受けることも多いんです。この

考えてます。日本だけでは閉じてしまっている意識があるので、無理にでも外に出ていかないとって思いは強いですが。

廣田 僕は昨年の夏にセネガル、コートジボワール、ルワンダ、ケニア、エチオピアに1か月半ほど行ったことで、建築の根本にある人間そのもののへの関心に立ち戻ってきました。人間らしさがどう建築に表れるのか、建築を通して人間がどうつながっていくのかに今は興味があります。頭で考えているよりもアフリカまで行って見たらなんとかなったところがすごくあって、積極的に自分の身を投じながら建築を考えていきたいです。

#見学会 #勉強会 #朝のレクチャー

- 木野** 私は講演会や勉強会、住宅の見学会にもできるだけ参加するようにしています。就職して実務を経験すると学生の頃とはやっぱり建築の見かたが全然違って来るし、そういう場に足を運ぶことでいろんな方とのつながりもできるので。
- 笹川** うらやましいです。なかなか参加できていないので。
- 宮田** 僕の場合は、魚谷からこういうのに行ってみたらと誘われて足を運ぶことが多いですね。
- 木野** 引っ張ってもらえる感じがいいですね。
- 宮田** はい。あとは京都で行われている都住研(都市居住推進研究会)にも参加していて、不動産や行政の方と一緒に街歩きをするので、いろんな視点から京都の街を見る機会になっています。
- 笹川** 勉強の話でいえば、うちの事務所では毎朝30分ほどレクチャーの時間があります。若手のスタッフが日替わりで一つのトピックを担当して発表してくれます。
- 木野** 朝からすごい！
- 笹川** トピックは様々で、建築物を扱うこともあれば、書籍だったり、アートだったりするのですが、その発表に対してスタッフ全員で批評まで行う時間がすごく楽しくて。毎日やっているのが瞬発的にで思考をまとめるという点でも勉強になっています。
- 宮田** かなり鍛えられそう。
- 木野** そんな話の後にかわいい話になっちゃいますが、うちの事務所はおやつタイムがあります。そこで雑誌を広げながら榊原と話すことも多くて、ちょっとした図面の読みかたとか、私にとってはその時間が学びになっています。



笹川拓哉さん

京都工芸繊維大学大学院修了。
2020年より畑友洋建築設計事務所に勤務。

独立した建築家に向けた日々

設計事務所に勤務しはじめると、学生時代とはまた違った学びの機会が山ほどあります。一方で、もちろん仕事もたくさん。そんな“建築青春時代”を過ごす若手スタッフはどんな風に学んで、日々を過ごしているのか。その一端を教えてくださいました。

撮影・坂下丈太郎



木野智加子さん

京都建築大学卒業。
設計事務所を経て、2022年より
榊原節子建築研究所に勤務

京阪神の 建築事務所 若手スタッフ 座談会

#自分だけの時間 #散歩 #陶芸

- 宮田** 最近になって散歩を始めました。仕事終わりとか家まで歩いて帰ると1時間くらいで、街とか建物を見ながら歩いてます。夜なんてそんなに見えないけど(笑)、頭を使うというよりは感覚的に身体に入れる感じで。気になるお店があればちょっと立ち寄りたりもします。
- 木野** 京都はそれが楽しいですよ。私はなんだろう、結構やってるのは陶芸。建築と近いところもあるのですが、まずは無になって、でも手は動かすという時間がいいんです。建築から意識的に離れる時間を持つことも大事にしています。
- 宮田** どんなのをつくってるんですか。
- 木野** 最近だと招き猫とか。
- 笹川** 思ってたのと違う(笑)。僕は結婚して子どももいるので、自分だけの時間をとるのが難しくなっていますけど、子どもを連れて遊びに行くなど、子どもと街を移動することで見てくることもたくさんあって。道の段差ひとつとっても危ないなとか、街の当事者意識は高まっていると感じます。



#これからのこと

- 木野** 私は小学生くらいからこの仕事に就きたいと思って、資格も早く取りたくて専門学校を選びました。特に住宅をつくってみたいと思っているのですが、もう少し広く「暮らし」というキーワードが自分にとって大事だと掘めてきたところなので、そのあたりをもっと自分で言語化できるようにがんばっていききたいですね。
- 宮田** 大学院では京町家の研究をしていて、京都が地元でもあるので、やっぱり京都で設計をやっていききたい気持ちがあります。ただ、働きはじめると、建築ってただ図面を描くだけじゃなくて、施主さんとのコミュニケーションや役所との折衝、現場の職人さんとの関わりかたなど、トータルでやらなければいけないことが本当に多いなと身にしみて感じているところです。
- 笹川** 僕の地元は箕面の新興住宅地で、西国街道のような歴史ある道も通っているけど、町並みがどんどん変わっていて、そこで建築家として何ができるのかを考えていると思います。今の事務所を選んだ理由も、畑が手がけた「元斜面の家」を見た時にこれだなんて感じたというのもある。神戸だと六甲山との関係もあるので箕面に通じる部分もある。そこでどういう建築をつくるか、事務所での仕事を通して学んでいきたいですね。



宮田将史さん

東京理科大学大学院修了。
2022年より魚谷繁礼建築研究所に勤務。

#所長との時間 #建築への目線 #自分の発言

- 木野** それこそ建築を見る目線って学生の頃と大きく変わってきますか。
- 宮田** 確かに以前はひとつの建築という感じで見てましたけど、収まりやディテールとかを見るようにはなってきました。
- 笹川** 僕も同じですけど、一方で、畑は「風景構造」という言葉を使って説明しているのですが、大きな風景のなかで建築を捉えるようにも意識しています。
- 宮田** うちの事務所は海外プロジェクトも増えていて、ニューヨークと香港で僕も担当を持っているのですが、そうした出張先で魚谷がどう街を観察して、設計に落とし込むのかを間近に見られることはとてもいい経験になってます。
- 木野** うちのスタッフは私だけ。なので、榊原とは常に一緒に動いていて、クライアントとの接しかたから判断をくだす場面まで、その背中がいつも前にあります。
- 笹川** わかります。畑とは車移動することが多いので、その車中で話すことや、打ち合わせのときの場の雰囲気づくり方に学びが多いなと思うながら、僕は横で議事録をとっています。
- 宮田** そういった打ち合わせの時、どれくらい発言します？
- 木野** 悩ましいですよ。それ。私はディスカッション相手もすべて榊原になるので難しいところもあって。
- 笹川** 畑はすべての物件を同時に見ているので、どうしてもこぼれてしまう細かい部分はあって、そこは担当している者の責任として補足することもあります。
- 木野** ですよ。担当者のほうが見えてる部分もあるはずなので、そこは拾い上げて伝えたいですね。

〈長〉建築の本質として場所性ってすごく大きなことなので、建築誌で見かけるような世界の有名建築でも実際に見てみると、その場所性も含めてあらためて気付かされるのがとてもたくさんあるんです。有名建築でなくても、ふとした町並みでも風景でもいろんな手がかりがたくさん転がっているわけだから、本を読んでいるよりもよほど僕には勉強になる。やっぱり僕は人間が暮らすこの地球がどうなっているのか、その一部として建築設計があるものと常に思っていて。大学の最終講義でも「地球のリノベーション」というテーマで話しました。

〈波〉フランスのモンサンミッシェルにトルコの Cappadocia、インドのシャトルンジャヤ、クロアチアのドゥブロヴニク…ほんとに世界中を旅されてますよね。

〈長〉できればその土地に5年ほどでも暮らしたいけど、人生1000年なきゃ無理(笑)。ただ、自分のセンサーが鈍っているとどこに行ってもだめなんです。何を見てどう感じて考えるか、結局は自分次第なので。

〈波〉私は海外までは全然行けてないのですが、京都の岩倉で「ハレニワの家」という7戸まとめて設計するという機会をいただいた時に、岩倉の自然風景をよく観察するようにしました。その竣工後も、もっと深く岩倉の自然を知らなくてとは強く感じて、3年間のうち110日は岩倉の山に登ってました。

〈長〉それはすごい。ちゃんと見る側のセンサーが働いていれば、海外まで行かなくても岩倉でも十分にいろんなことが感得できるはずで。「ハレニワの家」にはそれがしっかり表現されました。

〈波〉山に入るのは半分は趣味というのがありますが(笑)。長坂先生は今年はこちらに行く予定ですか。

〈長〉イタリアです。20代で初めて行った国外がイタリアで、その時に訪れたシエナやアッシジあたりにはそれ以来行ってないんで、40年前に見た場所にあらためて足を運んだらどう見えるだろうかと。20代で考えたこともまだいくつか覚えているので、それも含めて今の自分がどう感じるか楽しみなんです。

〈波〉ちょうど私も昨年、20年前に自分が初めて依頼を受けて設計した住宅を買わせてもらったのですが、建築家とは生き方そのものだという長坂先生の背中を見ていて、かつて毎日のように現場に通って自分で設計した住宅に今、暮らしてみたいという気持ちになったんです。長坂先生の40年に対して、僕はまだほんの20年ですけど。

〈長〉自分にとって記念碑的な建物なわけだからね。そこから感じるものもたくさんあると思う。



長坂大

Mega
1960年神奈川県平塚市生まれ。1982年京都工芸繊維大学卒業。松永巖・都市建築研究所、新梅田シティスカイビルを設計していた原広司のアトリエ・ファイ建築研究所を経て、1990年にMega設立。京都工芸繊維大学との関わりは1985年から助手を務め、2008年教授に、2025年3月定年にもなって退官するまで40年に及ぶ。「学生って積極的なもたくさんいるんだけど、後にそれが空回りする場合もあって。自分の態度を決めて簡単に譲らない者が長続きするという、彼の場合はそちらでした。うちの事務所に入る時には、覚悟を感じましたね。」

じゃなくて、建築家としてのスタンスを伝えて仕事を始められたのだとすれば、少しは伝わるものがあつたのかなと思えてうれしいね。

〈波〉私が長坂先生からもうひとつ影響を受けたのは、本当に楽しそうに設計の仕事をされていること。そして、年に1度は数週間の旅をされて、世界中の建築や街を見て来られて、そのスライドを交えながら報告会を開いてくださるんですね。建築だけじゃなくて、街の成り立ちやそこに暮らす人のあり方を旅でのエピソードを交えて紹介されて、そのことにもいつも大きな刺激を受けています。

建築設計が前提にある人生

建築家

と 建築家

vol 05

ふたりの建築家の関係性を撮影します。
今回は、京都工芸繊維大学で
先生と学生という関係で出会った2人です。

撮影・小橋山貴裕



A.C.E. 波多野一級建築士事務所

1971年京都府京都市生まれ。1998年京都工芸繊維大学大学院博士前期課程修了(岸和郎研究室)。東京の伊藤喜三郎建築研究所で3年間勤めた後、2001～03年長坂大のMegaに勤める。2003年伊藤喜三郎建築研究所の大阪で勤めた後、2004年に独立。「僕が学生時代のことはたぶん長坂先生のご記憶には残っていないと思います。本気で建築に取り組もうと思ったのも遅かったですし、積極的に優秀な学生でもなかったんです。ですから、Megaに入社してから、肝が据わって建築について様々なことを先生から学ぶ機会ができたという感じです。」

波多野崇

〈波〉最初に勤めた東京の建築設計事務所では病院や福祉施設をやっていたのですが、その頃に雑誌で長坂先生の「桂の家」を拝見して、その鮮やかなプランニングが本当にすごいなと思いました。と同時に、これは個人の建築家でないか実現できないものかというのも直感的に理解できて、という頃に、ちょうど長坂先生がスタッフ募集しているという話を聞いて。

〈長〉実際、うちの事務所は学生時代から入ってくる人が多いので、経験者で入るのは珍しい。一般には最初の事務所での教えが強く刷り込まれていて、そっちの感覚になっているところからこっちの考えを伝えるというのはお互い大変なんです。なんだけど、彼の場合は、前に行ってた事務所がとても堅いところで建築計画などをきちんとやっているのは間違いなくて、その上で自分を変えたいところがあるからうちに来るんだろうなと。そういう意味での覚悟は感じました。

〈波〉長坂先生の事務所に入れていただくと、やっぱり会社員的な感覚とはまったく違うという経験はたくさんありました。たとえば、設計を進めていたある住宅の敷地の隣地にすごく大きな木があったのですが、開発にもなっても整地されて抜かれてしまったんですね。敷地外のことなんだけど、そのことに対してすごく怒っておられる様子を見て、その住宅だけじゃなくて、やっぱり街全体のこと、公共のことを考えるのが建築家なんだなって。

〈長〉大学で何を教えてきたのかといえば、構造や技術的なこともあるけど、設計を通してどう世界と関わるか、大げさに言えば、世界はこうにあるべきだという哲学を持てるかどうかなんです。大きな事務所に所属していうのが、個人で独立していうのが、建築家というのは本来はそういう姿勢であるべきです。施主の言うそのままでなくて、まずは建築、街、自然、人間のシステムについて自分の意見があって、その上で建築設計の仕事があって、施主がいてという順であって、このあたりは世間的にもまだ理解が追いついてないところかもしれないね。

〈波〉私も具体的に独立を考え始めたときに、自分がいいと思う建築や街のことを友人や親戚なんかに積極的に話すようにしたんです。それも、長坂先生が現場に向かう途中に見かけた建物や町並みに対して、もっと自分だったらこうするんだという意見や思考を積み重ねておられるのを目の当たりにしていたからなんです。そうやって建築や街の話をすることで、具体的に設計やリフォームの相談したいという人が現れて、それをきっかけに独立できました。

〈長〉独立したいから仕事をください、という単純な営業

独立した建築家として
あるために

👍 サント ベヴィトール

サントベヴィトール
神戸市中央区下山手通3-10-2202
①12時〜22時（土日祝11時半）※通し営業 火・水曜休
© @santobevitore1001



八木康行さん
ステュディオエイトアーキテクト
<https://studio-8-arc.net>



グラスワイン950円〜。
4種のチーズピザ2400円、16か月熟成生ハム1,800円など

兵庫・元町

あの人のオススメ

👍 建築家の行きつけ店から考える、街場の話。

Recommend Shop



朽木順綱さん
京都工芸繊維大学建築学専攻 教授
大阪工大で11年間勤めて、現在は京都工芸繊維大学に勤務。



4 回生の
山本明日香さん



メニューは日替わり。一般利用は1,200円〜（学生は540円）。



👍 菜の花食堂

大阪・梅田

（ 建築と料理は体験して味わなければわかりません。 ）

（ 変わっていく梅田が俯瞰で見られます。 ）

元 町の商店街内にあるビル内にアトリエを構える八木康行さん。夜遅くにスタッフを連れてふらつと訪ねたのが、こちらの「サントベヴィトール」との出会いだそう。その当時は元町駅そばの雑居ビル3階にあったが、20年11月に生田新道沿いの現在地へと移転。よりナチュラルで抜けのいい飲食空間となった。なかでも自然光の入る窓際のテーブル席が八木さんのお気に入り。「いい光が入るので、ランチミーティングと言いつつここで図面を広げることもありますよ。スタッフには、今日は「シーランチ」にしようかって」。チャールズ・ムーア設計による海辺の名リゾート建築「シーランチ」と八木さんの事務所の頭文字「SM」をかけた言葉遊びだ。

系列店でも人気の石窯焼きのピザは、もっちりとした生地に、持ち上がったミミまでおいしい「神戸スタイル」。ワインはグラスだけでも赤・白で各8種を常時揃え、店長にしてソムリエの井上健さんが料理に合わせてオススメを提案してくれる。「建築と料理は近いところがあって、実際にやって体験し、味わわないことには何もわからない。写真でいくら見ても、ね」と八木さん、いい店には「福利厚生も兼ねて」スタッフを連れていくのだそう。

梅田・茶屋町にある高さ125mのO-1梅田タワーは、大阪工業大学の都市型キャンパス。淀川沿いに広がる大阪工業大学大宮キャンパスとはまた環境が違って、こちらでは「周囲にいくらでも生きた教材が見出せるし、大阪のまちの様子を俯瞰的に把握することもできるんです」という朽木順綱さん、昨年までのこのタワー内にある空間デザイン学科で准教授を務めていた。

このタワー最上階21階に設けられた菜の花食堂は、昔ながらの学食とは一線を画す、カフェのような雰囲気。というのも夜や週末はイタリアンレストランへと営業形態が変わるため。「実はVIPルームも設けられているのですが、そういったハイエンドな空間に学生が日常的に触れられるのはいいですね。ここだと学生と教員が隣りあわせの席になるのもごく自然なこと」。と居合わせたのが、4回生の山本明日香さん。「Diploma x Kyoto26」(※有志の建築学生による合同卒業設計展の学生代表に就任したという近況を朽木さんに伝えながら、そのまま相席でランチタイム。好きなものをマイペースに食べつつ話せるビュッフェスタイルで、料金は変わるものの学外の人でも利用可。都心で実現した新しい学食のカタチだ。

兵庫地域会による

すまいまちづくり育成塾「T-CUBEによるボクたちワタシたちの村」

p05で紹介した京都地域会の活動だけでなく、兵庫地域会でも子どもたちに向けた、独自の建築教育プログラムを2011年から実施しています。これは、T-CUBEと名付けられた9cm×9cm×9cmのダンボール製の立方体を用いたワークショップで、ひとつの建築物ではなく、建築が互いに影響しあいながら存在していること、共用空間の大切さ、そして、まちづくりや地域コミュニティへの意識を育むプログラムになっています。毎年、小学校や中学校と連携しながら開催。今年7月に実施した23回目となる育成塾では、大阪の開明中学校の2年生全員が参加して、約300人の中学生と約40人の建築家が向き合う大規模な授業となりました。



実行委員長を務める尾瀬くみさんの話

私自身は2016年から関わっていき、2022年から実行委員長を務めています。プログラムの内容はスタートした2011年からほとんど変わってなくて、立ち上げたみなさんからは自由に発展させてくださいねと言われているのですが、ささやかなアレンジが入った程度。立ち上げ時からよくデザインされたプログラムなんです。参加する子どもたちは手と頭の両方を使いながら、かつコミュニケーション力を発揮して進めていくのですが、特にコロナ禍以降は、子どもたちの間でも対話するという時間が減っているので、その点でも学校側から評価をいただいています。6人で村の形を考えていく際には、「お店を集めてお金儲けができるようにしたい」「いい景色が見えるように配置しよう」とかって班ごとに個性が表れてくるので興味深いですね。この数年は中学校のキャリア教育の枠組み内で実施していて、建築家になりたいという気持ちにダイレクトにつながる子もいます。私たち建築家にとってもデザインや造形面でのアドバイスだけでなく、子どもたち同士の話し合いをうまく促していくようなところでも能力を発揮できますので、大きな学びの機会になっています。

プログラムの流れ



プレ授業

さまざまな町並みや集落の成り立ちについて伝えとともに、建築家の仕事内容を紹介する時間も設けている。また、T-CUBEの実物大模型(1.8mの立方体)を用意して、そのスケールを体感。以降の作業を実感を持って進められるようにという工夫も。

個人作業

まずは個々にT-CUBEの内部空間の使い方を自由に考えて、スケッチを描いてみる。

2人1組で

それぞれのT-CUBEに窓や扉などの開口部を開けた後、もうひとつの共用T-CUBEを含めた3つのT-CUBEをどうつなげるか、2人で話し合う。3つつながったT-CUBEはいわば建物のようなもの。

2人×3=6人グループで

3つつながったそれぞれのT-CUBEを紹介しあった後、丘や池などの地形があらかじめ設定された敷地に集まったT-CUBEを配置して村をつくる。

クラス全体で

それぞれのグループごとの村について発表しあった後、村をつなげて大きな街をつくる。

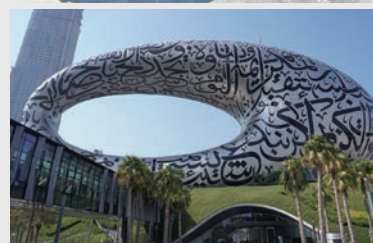


JIA (The Japan Institute of Architects) とは

JIA=日本建築家協会は、建築家が集う公益社団法人です。建築、まちづくりを通して社会公共に貢献する活動をしています。その近畿支部では滋賀、京都、兵庫、大阪、奈良、和歌山の各地域会と、さまざまな委員会、研究会、部会が活動をしています。

<https://jiakinki.org/>

JIA近畿が行っている建築イベントやコンペ、おすすめ情報などはホームページで更新しています。



帰国後には、AIAインターナショナルからの招待で「大阪・関西万博」へ同行し、シンポジウムにも参加。今回の海外視察をきっかけとして、その後もAIAとの関係が続いているのは我々メンバーにとって本当に嬉しい限りです。

24年10月、JIA近畿支部住宅部会「国際交流事業」にて、コロナ禍後では初の海外視察として、昨今、急速に発展を遂げる中東の都市であるUAE(ドバイ)アブダビ、カタル(ドーハ)を訪問しました。参加者は18名。近畿を中心に他の支部からも加わり、建築家のみならず構造物や建築メディアなど、多岐にわたるメンバーが集まりました。今回の視察では、刺激的で進化しつづける現代建築やアートのダイナミズムを実体験し、新たな視点を得ることに。しかも、ドーハにあるカタル国立図書館では、偶然、設計者であるレム・コールハース(OMA)に

遭遇するなど、記憶に残る出来事が多く、楽しく濃密な時間を過ごしました。また、視察だけに留まらず、現地のAIA(アメリカ建築家協会)中東支部メンバーとシンポジウムなどを通じて交流し、通常では見学できないエリアを案内していただくなど、直接、国際的な視野を広げる貴重な経験となりました。



国際交流事業で中東へ。
AIAとの交流も深まっています。

文・梅原悟(住宅部会)

地域の歴史風土に支えられて

滋賀

滋賀地域会では「景観まちづくりフォーラム」の開催を継続し、今年度で15回目を数えました。JIAが、大津市から「古都大津の風格ある景観をつくる基本計画」のもと、「景観整備機構」として認定されていることから、大津市の協力もいただき、地域の歴史風土に支えられて保全されてきた史跡や変遷してきた街並みの歴史をたどるワークショップを開催してきました。市民に開かれたこの会には、毎回定員を超える参加者



地域の登録文化財のこれからを考える

今後はこの経験を活かし、会員の皆さんが活躍しているそれぞれの地域をクローズアップできるような事業として、それぞれの地域が勇気を得られるような学びの会として取り組んでいけると良いなあ、と感じています。興味深く周りを見回せば、学ぶための素材がゴロゴロしている、そのような豊かな地域で活動していけることを楽しんでいます。

KYOTO

岡田良子 JIA近畿支部 京都地域会長

昨年、私事ですぐが祖母が亡くなりました。享年百八歳の大往生でしたが、百歳を過ぎても現役で表千家のお茶道を教えるなど、近所ではちょっと有名なおばあさんでした。小学校の先生をしていたせいか、退職してからも何かというろなことにチャレンジをしていましたが、祖母が九十歳になったとき、「九十歳を機に陶芸を習い始め」と言い出して、亡くなる数年前まで続けていましたから、かれこれ十年以上はやってことになりました。それだけ続けると、なかなか味のある作品もできるようなってきて、なにかを始めるのに遅いも、早いもないものだなと教えてもらったような気がします。

最近、私の周りの建築家たちも、大学で新たに建築を学び直す人や、まったく違うジャンルの勉強を始める人が増えてきました。さすが、建築家は立ち止まっていけないと感心するとともに、大変、刺激を受けています。

個人的にはお茶を子供の頃から続けているので、いまだに先生に教えを乞うていますが、数年前から、いけばなを習いたいと思う



建築と子供たちのワークショップ風景

京都

何歳になっても立ち止まらない

大阪

カメラを持ってまちへ出よう！



築地本願寺(伊藤忠太設計、1934年竣工)

菅原英房 JIA近畿支部 兵庫地域会長

HYOGO



綿業会館(X-T50で撮影)

た際には、本堂のドームに足場が架けられ改修工事が進められていました。耐震補強や漏水対策を行いつつ、建具補修や彩色補修を進めるそうです。竣工から約90年に渡り信仰の中心であり続けた築地本願寺が、将来に大切に引き継がれていく事は素晴らしい取り組みです。近畿圏においても歴史的な建築物が多数残されていますが、維持が困難になり解体の危機にあるものを頻繁に耳にします。その価値をJIAの活動において広く共有して、歴史的な建築物の活用について取り組みたいと思います。

旅先の名建築

旅行や出張をする際には、行き先で必ず建築見学をします。特に歴史的な建築物を体験すれば、建設当時の社会情勢において建築家が重ねた工夫に惹かれます。永く愛される稀有な建築を見てみると、現在我々を取り巻く課題の中で建築家がどのように貢献するかを考えるエネルギーが沸きます。

友人との集まりで東京に行った際には、伊藤忠太の設計で1934年に竣工した築地本願寺を見学しました。インドの石窟寺院がモチーフと言われるチャイテイア窓や独自にデザインされた火燈曲線など、伊藤忠太が留学で心惹かれたものを丁寧に昇華させて取り入れていた様子が見られます。各所に動物の彫刻が配されていますが、建築全体にも生き物のような躍動感が感じられます。正門に対して中央に本堂、右に寺務所、左手は集会所を配して開かれた新しい宗教施設が意図されました。仏教史の原点を見つめて、未来に通じる力強い寺院を目指した伊藤忠太の強い思いを感じます。

兵庫

坂井信行 JIA近畿支部 大阪地域会長

OSAKA

全く個人的なことで恐縮ですが、先ごろカメラを新しくしました。みなさんは仕事から写真を撮る機会も多いと思います。振り回れば私がフィルム時代に使っていたのはコンタックスのSTというカメラでした。コンタックスはライカと共に名を馳せたドイツのカメラですが、一時、途絶えていたブランドを日本の京セラが復活させました。私が使っていたのはその時代のものです。レンズはカルツァイス、フォーカスはマニュアルの時代です。

デジタルカメラの時代になり、EOSのGR digital IIIという小型の

カメラを入手しました。レンズは28mm単焦点のスナップシューター。デジタルもそろそろ一眼レフが欲しいと思った頃、キャンノンに乗り換えました。マウントアダプターをつければコンタックス時代のレンズが使えるという理由もありました。長く使っていたのはEOS 5D Mark IIというカメラでした。

カメラは外に持ち出して使うもの。5Dという重いカメラも年齢とともにしんどくなってきました。そこでこの度、思い切ってフジフィルムのX-T50という小型のカメラに乗り換えることにしました。このカメラの面白ところ、はフィルムシミュレーションというフィルム時代の画質をデジタルで再現する機能があることです。

コンタックスからデジタルのGR II、そしてフジのX-T50。デジタルにはありますがフィルム時代に回帰するような印象もあります。風景や建築を撮ることが多いですが、まちなかのスナップも増えそうです。みなさんもカメラを持ってまちへ出てみてはいかがでしょうか。

文化財級の民家の未来のために

奈良



お話し会の様子

奈良地域会では昨年度に奈良地域会員の勝村一郎さんの主導のもと、地元商店街の方々からの依頼により「餅飯殿商店街の商業施設の設計コンペ」を実施し、全国から100者以上の多くの応募をいただきました。現在、実施設計が進行中でそのサポートとアフターフォローを地域会でを行っています。

により、今後の事業計画の方針を決めるためのアイデアコンペの実施を提案しました。6月2日に要項が発表され、現在、参加募集中です。自由な提案を求めているので、多くの応募が予想されています。ご興味がある方はぜひ参加を希望するところです。これからの時代の先取りをするようなアイデアを期待しています。

また昨年度から建築家の立場で、奈良の登録有形文化財所有者の会の立ち上げ準備のサポートを行っています。奈良県内の文化財級の民家保有者を対象に維持管理や建築をどう未来に引き継ぐかといった多くの課題を、所有者の方々との定期的なお話し会を行っているながら、会の立ち上げ準備をしているところです。全国的に空き家問題が社会的課題になっていますが、共通する課題もあり新たな活動に向けて模索中です。

奈良地域会では今年度も引き続き、新しい時代の変化を見据えて社会から何が求められているのか、JIAとして何ができるかを踏まえながら、将来に向けて先導する新しい発信ができればと考えています。

NARA 山本光良 JIA近畿支部 奈良地域会長

WAKAYAMA

瀧川嘉彦 JIA近畿支部 和歌山地域会長



和歌山地域会ではほぼ毎月会員のための勉強会を開催しています。和歌山地域会の会員が大阪で開催されている講演会等に参加するのが難しいこともあり、独自に勉強会を開催して会員の建築に対する知識ややる気の向上を目指しています。勉強会には和歌山地域会の協力会員さんが商品PRをする時間を設け、会員企業の皆様との交流も行っています。また会員外の方も多数参加してもらっていますので将来的に会員の増加につながれば良いと考えています。

の歴史を深く考察されており、町家の改修や現在進行中の建築のお話を聞かせていただきました。6月には『新建築』でも紹介された和歌山県海南市冷水浦のReSHIMIZU-URA PROJECTを現地にお伺いして見学させていただきました。大工を本業とされている伊藤智寿氏が自ら古い建物を買取り、ご自身で改修してカフェや飲食店を作り地域の方と共に街づくりを行っている現場で、ご自身にご案内いただきレクチャーしていただきました。こちらのプロジェクトは11月22日に和歌山で開催される近畿支部大会のエクスカージョンでご参加の皆様にも見ていただく予定です。

10月には毎年行っている建築ツアーを開催しました。今年は新潟方面で2泊3日で目いっぱい建築を楽しんできました。

今年も和歌山地域会の活性化のために色々と勉強会の企画を考えています。

和歌山

ほぼ毎月、勉強会を開催

わたしのtable



vol.05 中田光輝さん(GENETO)の事務所テーブル

事務所移転の際に制作したテーブルです。天板の長さ4m、天然石研ぎ出しのテラゾーとなっていて、この場で淡路の左官職人の植田俊彦氏と共に手作りましたものです。天然石は一つ一つ手作業で疎と密を意識して埋め込み、数日間掛けて削り出していました。単一的な表情ではなく、動きのある表情に仕上げることができました。マックス14人は座って対話することができるため、事務所での会議用だけでなく、人を招いての食事会やパーティーにも活用されています。

table

table 5号 2025年10月1日発行

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館4階

企画・制作 JIA近畿支部 広報委員会 紙媒体ワーキンググループ
萬野光雄(萬野光雄建築設計事務所)・広報委員長
梅原 悟(UME architects)
遠山健介(遠山健介建築設計事務所)
西本寛史(nha)

編集・取材 竹内 厚
デザイン タナカタツヤ
表紙ビジュアル 間芝勇輔



table

建築家と建築から
街を活気づけるマガジン

